



かつて(一九六九年から一九八四年まで)、附小の林間学校は、北アルプスの燕(ツバクロ)岳に登っていました。その後、「ゴール目指して」の一番を歌うたびに、その時の出来事が思い出されていましたが、

2018夏・燕AGAIN
一九七五年(昭和五十年)卒 一組 一力健一郎



世田谷区深沢 4-10-1
東京学芸大附属世田谷小学校内
青山附属同窓会
<http://aoyama-dosokai.jp>
青山附属同窓会 検索
発行人 森 昭彦
編集人 斉藤研一

昨年七月、四十数年振りに、有志(七五年卒六名・七八年卒六名)で、「肩に食い込むザックに耐えて」、燕岳に登ってきました。そもそものは、当時、体調不良で山頂まで辿りつけなかった同級生たちに、いつかはこの絶景を見せてあげたいと、ずっと心に思い抱いていた企画で、今回その中の一人が登頂し、思いが実現しました。七五年卒の卒業アルバムには、澄み渡る青空の下、燕岳山頂をバックに全員で写っている集合写真が掲載されていますが、今回も、天候に恵まれました。

五十年間付き合っている同級生と一緒の、槍ヶ岳をはじめとする北アルプスの山々、そして遠くは富士山を見渡す山頂からの眺めは、時を超えて、当時、何を思っ眺めていたのかを思い出させ、至福の時に包まれました。そして、当時と同じアングルで記念撮影。今回は、小学校六年で麓から頂上まで日帰りで登った山を、途中、山小屋・燕山荘に一泊する行程としましたが、それでも五十代には結構大変でした。日頃、運動をする機会があったり、出来る限り階段を使うこと等を心がけている人は淡々と登れましたが、そうでない人は、ゆっくり登っても、心拍数が上がったり、息が切れたり、足がつつたり、



膝が痛くなったり。それでも、プロの山岳ガイドさん、アテンドさんにサポートいただき、全員が予定通りに無事下山して中房温泉に。お風呂上がりビールが美味しかったこと。この燕AGAINの企画は、今回、希望していたのに参加できなかった仲間もいて、第二回以降も検討中です。二、三日の筋肉痛を覚悟して、「あの日に続く今日の道を」、「ゴール目指して歩いて」みたい方は、ご照会下さい。(e-mail:onepower915@gmail.com)



ちくらの くなて ちつホ

いよいよ今夏オープン
「ちくらのつなぐホテル」
一九八八年(昭和六十三卒) 二組 金子岳人

長年親しまれた「青山荘」は、耐震補強や用途変更の改修工事を経て、今夏「ちくらのつなぐホテル」として開業する運びとなりました(8月開業予定)。

懐かしさは残しながらも、個室(4人×8部屋)、大部屋(15人×2部屋)、テント区画(4人×5部屋)として皆さまをお迎えする準備を進めています。

ご友人とご家族とぜひ遊びに来てください。千倉町でお会いできることを楽しみにしています。

(株式会社ブルー・スカイ・アソシエイツ 代表取締役)

外観 (完成予想図)

初めて訪れる人の誰もが目を惹かれるであろう印象的な三角屋根の外観は、ベースとなる青山荘の建物はそのままに、大規模な耐震補強とコンセプトに基づいた家具等を造作しております。ちくらのつなぐホテルのブランドロゴも、この外観を反映しております。



カフェ棟1F (完成予想図)

建物の中でも、もっとも印象的な場所がこのカフェ棟。青山荘時代はもちろん、ちくらのつなぐホテルでも多くの方々にお親しまれていく場所であってほしいと考えています。

ホームページ <https://chikura.tsunaguhotel.jp/>

インスタグラム https://www.instagram.com/chikura_tsunagu_hotel/

フェイスブック <https://www.facebook.com/chikuratsunaguhotel/>

(株式会社ブルー・スカイ・アソシエイツ 報道関係資料より転載)

同窓会と「藤棚」

幹事長 森 昭彦

平成から令和へ、今回の改元は前回と違い、明るいのみやかな雰囲気の中で迎え、我々が母校も、明治、大正、昭和、平成、令和と五つの時代を経ることになります。

母校には九〇周年の時に昭和天皇を、一〇〇周年では当時の皇太子殿下、妃殿下（現上皇陛下ご夫妻）をお迎えしたことは、多くの同窓生の記憶に残っていることです。今時そんな時代ではないと言われるかもしれませんが、一五〇周年の時には、天皇陛下ご夫妻にお出でいただけないものかと無責任な妄想がふくらみます（幹事長の個人の妄想で、同窓会の意見ではありません）。

さて、本年の新人会員を迎え、同窓会の会員数はついに一人を越えました。同窓会ではそのうち七〇%の方の御住所を把握しております。

同窓会の会費は、会費を請求しないご高齢（八十二歳以上）の方、及び卒業後十年以下の方を

除き五千名ほどの方が会費請求対象になりますが、現在の納付率は約二四%となっております。

新人会員からは小学校卒業時に入会金として、十年分の会費に相当する一万円を頂いておりますが、学級定員が三五名となった結果、昨年卒業者の人数が減り、毎年の入会金収入が約一五万円減少することになります。この金額は住所不明者の調査、名簿データの更新、問い合わせへの対応など、年間の同窓会事務を円滑に行うための事務的経費にほぼ匹敵します。同窓会運営上大きな問題になってきます。同窓会費未納の方は是非お納めくださるよう御願いたします。

同窓会では、この会報「藤棚」を通じて皆様とつながっております。「藤棚」は会費納入の有無に関係なく、住所のわかっている会員全員にお送りいたします。その「藤棚」とは何だろうかと考えてみました。別に「藤

棚」を読まなくとも、同窓会員にならなくとも、日常困ることは何もないでしょう。

しかし、附小を母校とし、そこに多くの思い出を残す卒業生にとつて、「藤棚」は思い出を呼び起こす宝箱と言えるのではないのでしょうか。本号掲載のタイムカプセルのお話しも、嘗ての「藤棚」への寄稿を手がかりに実現したとも言えるでしょうし、燕岳登山の投稿にご自分の燕経験を思い起こされた方も多いことと思います。燕岳なんて知らないよ、自分の知らない時代のことじゃないかと思わずに、そこに自分が在学中はどうだったのか、と自分の知る附小を重ね合わせることで、思い出が再生産され、自らの小学生時代に対する新しい見方が生まれることもあるのではないのでしょうか。世代の離れた同窓生の寄稿を読むことで、大げさな言い方をすれば歴史の一断面への証言を知ることにもなります。

この様な「藤棚」を通じて、同窓生の皆様にとつて同窓会が身近な存在になることができれば幸いです。

天皇陛下のご退位

平成三十一年四月三十日、天皇陛下がご退位され、陛下は「上皇」に、美智子さまは「上皇后」となられました。

同窓会員の皆さんの中には、昭和五十一年三月、附属小学校の創立百周年に際して、上皇ご夫妻（当時は皇太子ご夫妻）をお迎えした時のことを懐かしく思い出された方もいらっしゃるのではないのでしょうか。当時の写真を、『青山会報』通巻五〇七号から転載させていただきました。



授業をご覧になる両殿下



式場（児童館）にお入りになる両殿下



同窓会の皆様、いつも附属小学校をあたたく見まもりご支援をいただき、ありがとうございます。

開校から百四十四年目の春を迎えました。昨年度は、十月一日の台風24号により、事務室南側のヒマラヤスギの大木が、事務室と同窓会室の間の通路に倒れました。また、運動会で「みんなの旗」の支柱となっていた下校庭赤ステージ後ろのヒマラヤスギの大木も倒れ、体育館を直撃し、屋根と窓に大きな損傷を与えました。その他にも正門横の松の木の根が浮いてしまったために、伐採をするなど、倒木の恐れのある樹木の伐採を行い、世田谷小学校にも大きな爪痕を残しました。

ルを寄贈していただき、先日五月二十五日(土)には、暑さが心配される中、令和元年度の運動会が開催されました。令和最初の運動会は、青、白、橙、全ての組の得点が三〇〇点に並び同点優勝という結果でした。

施設面では、昨年度体育館トイレを改修し、きれいで使いやすいトイレになりました。今年度の夏には本館の空調の入れ替えをし、子どもたちが安全に安心して学校生活を過ごせるよう環境を整えていく計画です。目下の悩みは、大学からの予算がほとんどつかない状況で、老朽化が進み、滑りやすくなった上校庭の改修をする予算がなく、改修のめどが立っていないことです。



年度から文部科学省の「研究開発学校」の指定を受け、さらにその次の学習指導要領の改訂に向けて、未来の教育のあり方についての研究について一歩踏み出したところです。以前より本校の教育目標である「思い豊かに考え深くともに学ぶ」自律した共存性豊かな子どもを育もうという方針に基づき、本校の研究開発課題を「未来社会を創造的に生きる『学びを自分でデザインする子』を育成する、個人に基づく『じぶんラボ』と、教科・学年を超えた協働的探究の『みんなのラボ』の双方で駆動する教育課程及び学習環境デザインの研究開発」と設定し、取り組みははじめま

た。未来に向けて提案性のあ
る研究となるよう進めてまい
りたいと考えております。

【先生の異動】

☆お送りした先生

▽清水 良先生

五年間の人事交流期間を経て東京都に戻られました。

清水先生が担任された卒業学級のクラスネームが「哲学よ、カオス」ということに象徴されるように、大変哲学的であり、詩的であるという印象の清水先生です。お話される時は、優しく語りかけるように話され、内容は理路整然とされており、説得力のあるもので、いつも感服しておりました。

国語を専門とされ、「きく」を重点とし、友達と協働して、自律的に学びを創造していきけるよう研究を進めておられました。

二年生での実践では、「校内郵便局」の活動を行い、手紙を書くという国語の学習と、郵便局の仕事について知り体験するという生活科との学習を関連させながら、子どもにとって身近であり、興味をもつ題材から学びをつくっておられ

ました。昨年の三年生での実践では、地域の「エーダンモール深沢商店街の昔・今・未来」を題材にし、社会科の学習から発展させ、クラスのテーマとして学びを深めておられました。五年生がクラスのテーマとして取り組んでいた「お金に関するプロジェクト」と、一堂に会して語り合う場面を設定し、学習を進められたことは、本校で取り組みはじめている新たな学びへの挑戦に一石を投じられたものであり、先導的な役割を果たされたものと感じております。

今後の東京都での活躍をお祈りしております。



令和元年度の運動会

この頃思うこと

元校長 北野 目出男



世小同窓会誌「藤棚」への
寄稿は久しぶりです。執筆依
頼を受けて世小校長時代（一
九九一年四月～一九九六年三
月）の思い出がよみがえって
きました。お世話になった故
間中孝貴副校長をはじめ、諸
先生方の顔、子供たちのご父
母の方々の顔、子供たち、特
に、校長室によく遊びに来た
子供たちの顔が走馬灯のよう
に浮かんできました。私と子
供たちとの交流の様子は、『藤
棚』（東京学芸大学附属世田谷
小学校教育研究会）一七、一八
号に寄稿していますのでお読
みいただければ幸いです。

あの頃、一年生だった子供
たちは立派な社会人となり、
同窓生の集まる折には私にも
声をかけてくださり、当時の
思い出を語ってくれます。こ
の時間は、大学の教え子たち
との集まりで過ごす時間とは

異なり、人間の成長のすばら
しさと共に小学校教育の重要
さをひしひしと感じることの
できる時間です。

六十四歳（一九九六年）で定
年を迎えた私は、現在、八十
七歳になりますが、幸いなこ
とに、いくつかの大学から理
科教育（生物教育分野）の講
義を依頼されたり、NGOの
自然学校などから環境教育を
中心とした自然観察の指導を
依頼されたりして結構忙しく
過ごしています。

自分の好きな道で老後も社
会貢献できることを感謝して
いますが、大変気になること
があります。学生たちを含め、
一般社会人の方々も、身近に
生きている野外の生き物たち、
草や虫たちの名前（和名）に無
関心であることです。二〇一
九年五月六日「生物多様性及
び生態系サービスに関する政



府間科学政策プラットフォーム（PREF）は、すでに動植物
約一〇〇万種が絶滅の危機に
あることを警告し、自然の保
全と再生、持続的利用のため
に、経済や社会、政治、テクノ
ロジーなどの点で「根本的な
変化」の必要性を訴えてい
ます（朝日新聞、東京、二〇
一九年五月七日付、朝刊）。
自宅近くのフィールドで自
然観察をしながら、これまで
いた生き物の種や個体数が日

日に少なくなっていること
に気が付きます。この事実
に気が付くためには、身近に生
きている生き物の名前（和名）
を知っていることが必要です。

『野生の実践』（山と溪谷社、
二〇〇〇年）という本を出版
され、二〇〇〇年一月に来
日された二十世紀を代表する
といわれる米国の自然詩人
ゲリー・スナイダーさん（八
十八歳）は、奈良康明駒沢大
学前学長との対談の中で、奈
良先生の「都会でどうしたら
野生の実践ができるのか」と
いう質問に対して、「都会でも
植物が鉄道沿いに生えている。
野鳥も飛んでいて勇気つけら
れる。野生は、空気、水、土、
草木、動物とどこにも表れて
いる。そこに人間も含まれる。
動植物の名前を覚えるなどマ
ナーをわきまえて接すること
が実践につながると思う」と
答えておられる（朝日新聞、
東京、二〇〇〇年十月二十三
日付、夕刊）。私は、このお話
を知って、野生の動植物の名
前を覚えることは自然と接す
るときのマナーであることを

改めて痛感しました。

ところで、最近、次のよう
な記事を読みました。「いま、
政府は、仮想空間と現実空間
を高度に融合させた「Society
5.0」（超スマート社会）の実現
をめざし、特に教育分野での
改革を進めている。全ての人
とモノをネットでつなぐIoT
で新たな価値を生み出し、人
工知能（AI）により必要な情報
が必要な時に提供され、ロボッ
トや自動走行車で人の可能
性が広がる未来の社会という」
（朝日新聞、東京、二〇一九年
五月十五日付、朝刊）。

これからの人類は、このよ
うなシステムに適応しながら
進化（？）していくのでしょ
うか？ 本物の自然とのやりと
りのなかで生きてきた私は、
やはり、自然そのものである
自身の体をフルに使える生き
方、本物の自然との交流の中
で五感を鍛える生き方の必要
性を強く感じています。「超ス
マート社会」も自然との共存
を前提として構築して欲しい
ものです。

（東京学芸大学名誉教授）

むつみ会 タイムカプセル同窓会のご報告

一九八〇年(昭和五十五)卒三組 前野 貴美

「卒業の記念にみんなの大切なものを入れたタイムカプセルをどんぐり山に埋め、一〇年たったら再会して掘り出そう」。

そんな約束をして小学校を卒業した私たちでしたが、約束を果たさずそのまま卒業後四〇年近い歳月が流れ、忙しい日々を追われていつの間にか小学校のクラスで集まることもなくなり、最後の同窓会がいつだったかの記憶もなくなるほど年月が流れていました。



このたび約四〇年ぶりにタイムカプセルが発見されたことを契機に、同窓会が開催されました。十六名のクラスメンバー、三〇四年の頃の担任だった高橋阿楚江先生もご出席くださり、近況、思い出話で話は尽きず、時間がいくらあっても足りませんでした。

タイムカプセルといっても近未来的なカプセルのイメージと程遠い、まさかの「カメ」で、中には手作りの文集や将来予想アンケートなどが詰め込まれており、当時の思い出話にまた花が咲きました。

もう二度と集まることもなかったかもしれないなかつた私たちを、タイムカプセルはつなぎとめてくれて再会させてくれました。タイムカプセルを埋めることを提案してくださり、将来の再会をセッティングしてくださった今は亡き恩師の間中孝貴先生。

実はタイムカプセルはどんぐり山の改修工事で、早い時期に掘り出されて小学校で保管されていたとのことなのですが、世代も代わり私たちが直接知る方もいなくなっているにも関わらず、大事なものに違いない、いつかタイムカプセルの引き取り手が現れるかもしれない、とそのまま大切に保管してくださっていた母校の先生方。

お子さんが母校に進学し、タイムカプセルの思い出を友人が「藤棚」に寄稿したこと、その記事をご覧になり、保管されているタイムカプセルがそれではないかとお声をかけてくださった友人のお子さんの担任の先生。

「見に行きます」と言っただものの多忙のためにさらに一〇年ほど年月は流れ、友人のお子さんもとくに小学校を卒業した二〇一七年、中学校の同窓会で再会した小学校のメンバーが友人から「タイムカプセルの話なんだけど…」と、タイムカプセルが小学校に保管されているかもしれないという上記の話を聞きました

た。さすがにもう捨てられているかもしれない、と心配しながら小学校に連絡を入れたところ、友人のお子さんの担任だった栗原正治先生が現在副校長になられていて、保管されているとお返事をいただき、このたびの同窓会開催の運びとなりました。

卒業後四〇年近い歳月が流れて私たちが再会できたことは、多くの皆様に支えられた奇跡だと思いました。感謝の気持ちでいっぱいです。

同窓会では、はじめはお互いに誰だかわからず一瞬とまどいましたが、すぐに当時に戻り、あつという間に時間が過ぎました。幼い時期、長い時間を一緒にクラスで過ごし、いいところも悪いところも知り尽くしている隠し事のできない間柄です。気負うことなく話ができる、同級生は大切な存在だと思います。四〇年の歳月、それぞれ人生を過ごして再会し、古い時代のよさを残しつつ、進化したつながりができました。

人生半世紀を超えて生きてきて、先のことが心配にな



る気持ちもありますが、高橋阿楚江先生の、「まだ若いのだからやりたいことには何でも挑戦するように」のお言葉に勇気をいただきました。

生涯自分らしく生きていくための基盤となる初等教育を附属小学校で受けられたこと、何年経っても変わらない関係でいられる友と出会えたことに、心より感謝申し上げます。このつながりを大切にしていけたらと思います。

懇親会の開催

常任幹事 幣原 廣

三年に一回開催される同窓会懇親会が、昨年十一月十一日の土曜日午後一時半から、原宿の東郷神社に隣接しているクラブ水交にて開催されました。当初は三〇数名の申し込みがあったにもかかわらず、当日は二〇名しか出席されず、心配したものでした。

出席された庭山同窓会会長の挨拶及び乾杯で始まり、恩師である伴憲三郎先生、北野日出男元校長先生、黒澤俊二先生から、それぞれ在籍当時の附小の状況等を熱心にお話しいただきました。各先生方のお話は、当時を彷彿とさせるもので、もつと多くの方に聞いていただきたいと思わせるものでした。一九八八年卒業の金子岳人さんからは、臨海学校が開催されていた青山荘を、この度買い取った後、金子さんの会社でリニューアルしているところであり、間もなくリニューアル



オープンするので、今後、どしどし活用の申し込みをしてほしいと、パワーポイントを交えながら説明をしていただきました。同窓会としても、昔懐かしい青山荘が活用されるのは嬉しいことなので、本「藤棚」に同封されるチラシを参照の上、ご活用のお申し込みをしていただければと思います。

まだ、まだ元気！

一九五四年(昭和二十九)卒 三組
三和会幹事 小島章子&小野聖穂

このたび、もうすぐ令和という四月下旬に昭和二十九年三組卒、三和会のクラス会を開催致しました。出席常連者の所用による不参加もあり、ちょっと少なめの七名での開会となりました。

この懇親会については、同窓会幹事会に出席された会員から、今後出席しやすいように、人を呼べるようなイベントや、何か目玉になるような企画を考えていつてほしい、との提案もしていただきました。今後、常任幹事会としても、例えば卒業生で有名人のお話を聞く等、誰もが積極的に出席したいと思える会合となるよう、考えていきたいと思えます。どうか、二年後の懇親会には、皆様がたにご出席をいただきたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。

が、皆様、日ごろ元気にお過ごしのように、喉を湿し著が動けばお喋りの回転も上がり、まずは、日ごろの趣味やスポーツ活動の披露からスタート、続けて学生時代の部活動へと話が飛び交いました。しかし、やはり、昔の授業の時の話、運動会の活躍風景、いまは亡き大和先生をはじめとする諸先生方のあの時、この時、あの仕事の風景語りに及ぶと大きく盛り上がり、更には、かつての同級、同窓の方々の消息、エピソードに懐かしさと思いを求めてと、汲めど尽きぬ会話を過ぎ、気がつけば年寄りの会に多い病氣と孫の自慢話は聞かれませんでした。

また、結構ポリウレムのあるメニューでしたが、テーブルの上は綺麗サッパリ空き皿が並び、参加者皆様の健啖ぶりは依然健在でした。この調子なら、今年の高齢者運転免許更新講習の認知機能検査試験は、一〇〇点とはいかずとも九〇点は：：という事で、あつという間の時間経過、「来年もやれ」とのご託宣で散会！と相成りました。尚、前回のクラス会以降、お二人の方の御逝去の報に接しましたのは極めて残念であり、また寂しさを覚えたしだいです。ところで、久しぶりに会場のある銀座を歩いていると、周りには外国人だらけ。しかも、今回の会場である銀座ライオンも、外国人の飲み会グループがあつちのテーブル、こつちのテーブルに：：ビックリでした！

以上、クラス会開催のご報告を。お粗末様でした。

2018年度(2018年4月1日～2019年3月31日)青山附属同窓会 会計報告

(今期より西暦表示へ変更)

2. 経常会計(単位:円)

収入	金額	支出	金額
前年度より繰り越し	12,708,447	藤棚印刷費	373,680
		新卒者補充名簿印刷費	10,400
収入	1,816,000	懇親会	162,210
		回線使用料	78,240
銀行利息	265	データ管理費	179,496
		事務手数料	172,400
		H30藤棚・名簿発送費	916,093
		通信費・はがき印刷代	5,834
		事務用品費	628
		慶弔費・交際費	15,120
		会議費	4,723
		交通費	0
平成30年度収入合計	1,816,265		
		振込手数料	14,982
		会費返金 1名分	5,000
		本年度支出計	1,938,806
		次年度へ繰越	12,585,906
合計	14,524,712	合計	14,524,712

1. 同窓会基金(単位:円)

収入	金額
前年度より繰り越し	3,304,293
銀行利息	276
証明書手数料	216
合計	3,304,353

3. 資産の部(単位:円)

明細	金額
同窓会基金分	
三菱UFJ信託銀行 合	3,304,353
経常会計分	
三井住友銀行通知預金	1,500,000
三井住友銀行定期預金	3,023,577
三井住友銀行普通預金	1,256,077
ゆうちょ銀行総合口座	6,050,493
ゆうちょ銀行振替口座	658,573
現金	97,186
合計	12,585,906
基金+経常会計合計	15,890,259

会計監査承認 会計監事 吉原重和 松本洋典

附属世田谷中学校 緑友同窓会からのお知らせ

来年、緑友同窓会 70 周年記念総会&懇親パーティーを開催します。

日時 2020年5月23日(土)
16:00～19:00

場所 グランドプリンスホテル高輪

記念大会の詳細は、来春発行の会報「緑友」でご案内致しますので、附中卒業生の方はご予約下さい。

緑友同窓会 一力健一郎 (29 A)
onepower915@gmail.com

クラス会開催の報告記事を募集しています！
掲載を希望するクラスは、ハガキかメールで、
同窓会までご一報ください。
後日、折り返しご連絡いたします。

同窓会メールアドレス

aoyama-dosokai@edit.ne.jp

◆ 本年度の同窓会役員

会 長 庭山正一郎(昭和三十三年)
幹 事 長 森 昭彦(〃三〇年)
会計監事 吉原重和(〃三五年)
松本洋典(平成 八年)
常任幹事 小野聖穂(昭和二十九年)
幣原 廣(〃三七年)
一力健一郎(〃五〇年)
岡市典子(〃五三年)
小林哲子(〃五四年)
斉藤研一(〃五四年)
野口尚志(〃六三年)
瓶子可南子(平成八年)
日野真毅(〃二五年)

編集後記

今号では、図らずも林間学校と臨海学校にまつわる記事がそろいました。

編集作業中に、「青山荘、今夏リニューアルオープン」のニュースが届き、紙面の構成を急ぎ変更。この「藤棚」が皆さんのお手元に届いた頃には、すでに利用が始まっている予定です。「宿泊したよ」「立ち寄りつきました」といったご報告・感想、是非、同窓会にお寄せください。

創立百周年記念式典当日は、直前になって雨が降り出し、急遽、六年生が代表して校舎の階段で両殿下をお迎えしたそうです。当時の思い出などございましたら、是非是非、同窓会にお寄せください。

前五〇号の発行をふまえ、会報「藤棚」の歩みを振り返る企画については、次号以降、機会を見つけて掲載したいと思っております。
(斉藤)